

# 群馬県議会議員 入内島 道隆 県政報告

## VOICE OF GUNMA Vol.8

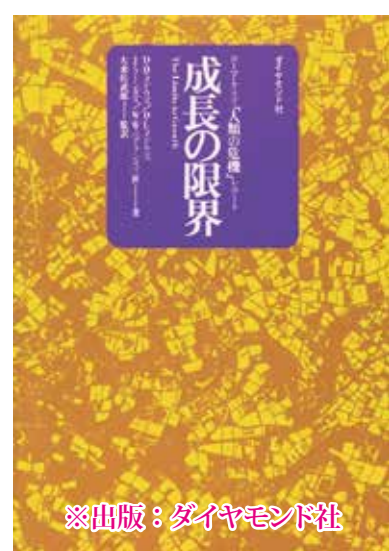


VOICE 第8号は令和5年第3回定例会の一般質問の後半部分になります。

環境問題をテーマとして、環境と成長の関係について知事と議論いたしました。そして成長とは何か?文明化することなのか、という点についても考察し、前回のプータンに続き今回はインドのラダックを紹介する中で、そのヒントを探っております。ぜひ、ご一読ください。

### 一般質問(後半)/令和5年第3回定例会

#### Q2 環境問題について 入内島道隆



地球への負荷をこれだけの規模でかけているという認識を持ち始めたのはいつ頃か考えてみますと、「成長の限界」という、1972年に出ている古い本によるところが大きいです。これはローマクラブが出した論文で、地球という星は、無限の成長を約束できるほど大きくはない、地球は有限なんだよということが記されているわけです。

この星の上で、70億とか、80億とか、90億、あるいは、それは多過ぎて、60億位が適正という考え方もありますけれども、何億が適正なのかというのは、私たちの暮らし方が決めているんじゃないかと思えます。大量消費、大量生産の生活をしていけば多くの方は住めないでしょうし、無駄のないシンプルな生活をすれば多くの方が豊かに住めるということもあると思えます。そういう意味では、私たちの生活のスタイルこそが環境問題なんだという結論に至るんじゃないかと思えます。

この本が警鐘を鳴らして、多くの方が賛同したにもかかわらず、50年たっても、この問題は解決に至ってないわけです。その原因は何かと考えますと、GDPを比較するからじゃないかと思えます。国を比べるときにこの数値を使うとなると、各国の指導者は、やはりGDPを上げていかなきゃなりませんので、無理が出るんじゃないかと。人に例えれば、その人がいくら稼いでいるかでその人をランクづけするようなもので、全くばかげていると思うんですけども、GDPという指標は使い勝手がいいので、流布しているということになると思えます。

ではGDPって何だという話になりますと、個人消費と企業投資と政府支出と貿易収支、これを足し上げたものなんですけれども、自給自足していると、GDPはゼロになってしまうんですね。そういうことも考えた上で、GDPということ我々は見つめていかなきゃいけないのかなと思っています。知事にお伺いしたいのは、50年前にこのローマクラブの「成長の限界」という本が出たにもかかわらず、環境問題の取り組みがなかなか足並みそろって進まない現状があると思うんですけども、それに対して知事はどう捉えて、群馬県でできることはどういうことなのかということをお話しいただければと思います。

#### 山本一太知事

コロナ禍でベストセラーになった斎藤幸平准教授の「人新世の『資本論』」という本を読みました。その中で、地球環境問題の悪化、富の偏在、所得格差の拡大というのは、これは資本主義が悪いと、資本主義が悪の根源だみたいな感覚ですね。資本主義やめ、成長をやめ、脱成長コミュニティという、まあ、新しい共産主義、新しいマルクス主義みたいなものに回帰すれば、みんなもって精神的に幸せになれるみたいな本で、面白かったんですけど、私は違和感を覚えました。

それに対して、高崎経済大学講師、柿埜真吾さんが「自由と成長の経済学」という本を書いたんですね。私の感覚は彼に近くて、脱成長と言うけれど、今我々が使っているスマートフォンも、SNSも、あらゆるものは成長の果実じゃないですか。ある意味、資本主義のもたらした

ものじゃないですか。資本主義はもちろん完璧じゃないと思うけれど、民主主義じゃないんですけど、なかなか他に代わる仕組みがない。我々がやるべきは、成長を諦めることじゃなくて、今まさに県議がおっしゃったように、成長と環境保全を両立していくことだと彼は主張していて、私は全く同感なんです。

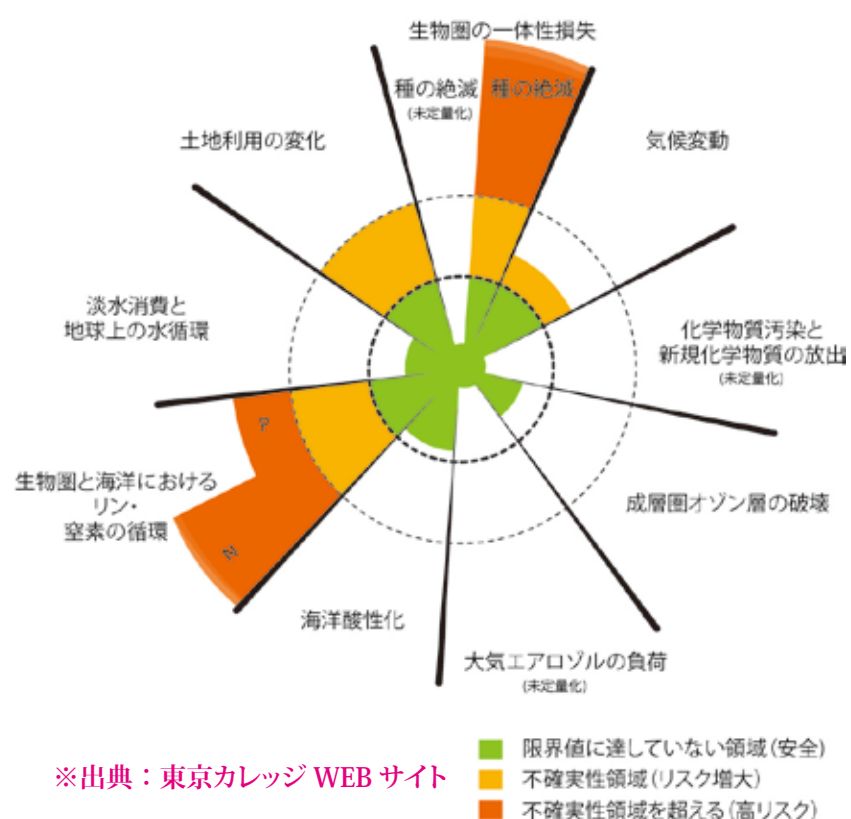
GDPにこだわらないということは、成長は気にしないということなんだと思うけれど、成長のないところには夢もないし、希望もないと思っているんです。GDPを争ってもしようがないとか、日本だけが30年間全く成長してないと、この20年間GDPが全然伸びていないのは日本と北朝鮮だけだから、そういう中で、いいじゃないかという議論もあると思うんですけども、知事として言えば、成長を諦めるということは、どんどん手持ちのリソースが減っていく。リソースがなければ社会保障に回すお金はありません。成長を諦めるということは、実はみんなで貧しくなる選択だと思って、ここはもしかしたら根本的な哲学が入内島県議とは違うと思いますけれども、私はそう考えています。

斎藤幸平さんの本をもう一度読んでみたんですけど、脱成長コミュニティ、資源の配分を共同体のみんなで議論して決める、昔のソ連とか中国の世界であって、内部の声を封殺するような流れになって、権力が制限されて、個性が殺されて、表現の自由もなくなるということなので、そういうリスクにも言及しないで、新しいマルクス主義に戻ったら世の中良くなるみたいなことは、私には受け止められないところがあって、成長は諦めない。しかしながら、地球環境問題はものすごく大事なので、地球環境問題と成長を両立させるということが正しい道だと思っています。これがまさにグリーンイノベーションであり、県が目指している2050年のカーボンニュートラルなんだらうと感じています。

#### 入内島道隆

斎藤幸平さんはちょっとマルキシズムに回帰している文章を書いているんですけど、そこは賛同していません。キャピタリズムの資本配分がちゃんとできていない、成果の果実、その成長の分配が偏っているというところに資本主義の問題はあると思うんです。僅か数%の上位の所得者が多くの資産を持っているという状況が今の資本主義社会なので、そこを是正していければ資本主義は問題ないと思いますけれども、そこがますます悪い方向に行っているというのは問題だと思っています。

成長を否定するものではないんですけども、日本が30年間成長していないわけですよね。成長していない日本が、さらに少子化になって、高齢化になって、労働人口が減っていく中で、何をもちえて成長できるかということを冷静に考えた方がいいと思うんです。成長できない以上は、成長できなくても回していける国づくり、地域づくりということも一方で考えていく。行政ですから、複線化というか、両にらみでやっていくというのがやはり必要じゃないかなと。成長を諦める必要はないですし、日本はまだどこかの時点で復活すると私は思っていますけれども、でも、それがなくても今の暮らしをちゃんと守っていけるというのが必要じゃないかと思っています。



50年前に出た「成長の限界」では、地球は有限で許容できる成長には限界があるということですけども、50年後に出た概念は「プラネタリーバウンダリー」というものです。「地球の境界」という話です。

この円の中に取まっていれば大丈夫だけれど、ここからはみ出たら駄目だ、そういった考え方です。その中で、2つのシナリオを用意しています。1つが小出し手後れシナリオです。気候変動に効果的に対応できず、2100年には地球の平均気温は25度以上上昇する。多様性等、自然に対する影響は極めて大きくなり、気候等の異常事態がニューノーマルとなる。国内外の不平等は増大し続ける。それでも1人当たりGDPは増大し、今世紀末には1人当たり1万ドルレベルに達する。人口は90億人を越えたレベルでピークを迎える。政府は異常事態に対応するだけで精一杯となり、社会的緊張は増大し、いくつかの社会が崩壊し、小さな国に分裂していく。これが悪いほうのシナリオです。

もう一つは良いほうのシナリオです。今世紀後半には人口が減少に転じ、2100年には2000年と同レベルの60億人程度になる。この人口の安定化は、再エネ、再生型農業の推進や、過剰消費の削減等と相まって、自然資源にかかる圧力の大幅な低減を実現する。温室効果ガス排出量は2050年代には約90%削減され、地球の気温上昇を世紀末には1.5度程度まで戻す見通しが立っている。社会的緊張は減少し、Well-beingが向上する。国民は政府への信頼を取り戻し、極度の貧困は解消される。

2つのシナリオを用意して、どちらかになりますよという話だと思えます。全ての人は後者のシナリオを選択しなきゃならないと自覚するわけですが、50年前に出た「成長の限界」からの結果を見れば分かるように、全ての人が行動に移すとは限らない、そのことがやっぱり問題だと思えます。分かっているけれど行動に移さない自分がいるということになると思うんですけども、それが、個人ではなくて、集団になって、国になって、世界になって動いていきますので、なかなか地球の環境問題というのは解決していかないと思うんです。どういったところからそういった糸口を見つけて解決に向かっていけばいいのか、知事のお考えをお聞かせください。

#### 山本一太知事

群馬県としては、できることを自治体としてやっていくと。それが、さっき申し上げた5つのゼロ宣言。これはしっかりと進めていきたいと思っています。それから、成長はいいかもしれないけれど、その富を一部の人が独占しているということが問題だと、そのとおりだと思います。群馬県でも、成長させるために、これからも未来への投資をやっていくつもりなんですけれども、どうやって全体を底上げできるかというのはとても大事だと思うんですね。脱成長論の話が出た後も、世界は成長を続けていますから、そこにはやっぱりイノベーションというものがあるわけだけれど、日本は残念ながら20年間まともなイノベーションが全く起こっていないので、成長できないということも前提に考えなきゃいけないというお話もよく分かるんですけども、私は成長できると思っています。

チャットGPTというのがあるじゃないですか。今いろんな自治体がこの生成AIとどう向き合うかという話があって、群馬県は積極的に使っていきたいと思うんです。中村伊知哉先生がやっておられるフォーラムにも出て、パネルディスカッションをやったんですよ。そのときに、初代デジタル担当大臣の平井さんが出てきて、チャットGPT、生成AI、なかなか欧米みたいにやるのは難しいと。御存知のとおり、AIってめちゃくちゃ電気を使うわけじゃないですか。日本の電力事情は大変じゃないですか。同じことを、デジタル田園都市構想の群馬県の会議にいられた岸田総理もおっしゃっていた。いろんなことを進めていく上では、現実的なことも考えなきゃいけないと。

例えばAIをどんどんやろうといっても、電力の限界ということだがあるわけじゃないですか。そのとおりですねって、夜、アメリカ人の友達に、チャットGPTとかいったって、日本は電力大変だから難しいと言ったら、その考え方は間違っていると言われたのね。今、アメリカのベンチャー起業家が何を考えているか。いかに電気を使わない生成AIをつくるかということに血眼になっているんだって。何か制限があるから駄目じゃなくて、制限を取り払うための知恵とか、科学技術とか、ベンチャーを切り開いていこうという思いがないと駄目だと言われて、なるほど、目からうろこだなと思ったんです。

群馬県をざっと見渡したときに、高崎とか前橋みたいな人口が大きい都市部と、吾妻とか、利根沼田とか、多分状況は全然違いますが、多野郡とか。

裏面へ続く



高崎とかは財政も豊かで、いろいろ成長をすとか、いろんな事業も打てるけれど、うちの地域はとにかく遠いし、まだまだ道路整備もできていないし、成長できないよという見方をする人もいますけれど、私はそうじゃないと思っているんですね。コロナ禍で変わったことっていろいろあるけれど、やっぱり地域の価値の再定義だと思うんですよ。スペースがあることが価値になっていたり、満員電車がなくて、スローライフみたいなものに余計価値があったりとか、こんなにネットが進めばパソコンさえあれば別に群馬県から仕事をしていてもいいわけじゃないですか。

だから私は、入内島県議が地元のいろんな高齢化とかを見ながら感じる思い、こういうところにそんな成長といってもという話があると思うんですけど、私はできると思っています。県の役目は、市町村、それぞれ状況は違うけれど、そういう前向きな気持ちで、いろんな成長の仕方、発展のやり方を模索して頑張ろう、だから力を貸してくれないかみたいなどと連携する、あるいは必要だったら国に持っていく。

かつて中之条だって、入内島町長とかいうすごい人がいて、あのピエンナーレを成功させたわけですよ。すごい町長だと思いますよ。みんなから反対されて、何だ、ピエンナーレって、鼻の病気とかか言われる中で、頑張ったわけじゃないですか。だから、私は成長はできると。だけど、今言った格差の問題は、みんながそれぞれ、それぞれの首長がやる気を持って、いろんな知恵を出し合って頑張っていけば、私は成長ができると、そういう考え方でいきたいと思っています。

最後に言いますが、地球環境問題はものすごく重要で、今の世界の傾向は、グリーンイノベーションですよ。環境問題は制約じゃなくてチャンスだと、そう捉える流れをしっかりと踏まえて、群馬県でも、環境森林部長を中心に、グリーンイノベーションを続けて推進していきたい。入内島県議の、ぜひお知恵とか英知もお借りしたいと思っています。

### Q3 グローバリゼーションと自立分散社会

#### 入内島道隆

3番目は、グローバリゼーションと自立分散型社会がどう調和するかということ。例えば江戸時代は三百諸侯と言われ、300近い大名・藩があり、独立していました。その藩を江戸幕府がまとめて日本という国をつくっていったので、ある意味、江戸時代は連邦国家と言えます。藩は経済を藩の中で回し自立していました。鎖国もしていましたので、ある意味、完全に循環型社会があったんだと思います。

もともと世界の国は、それぞれの国だけでまわっていったので、ある意味、自立していたんだと思います。それが国際的な社会になり、グローバルな社会になり、今に至っていると思います。グローバリゼーションという考え方ですけれども、これはある意味、合理的で、世界を1つの地域として考えましょう。1つの世界ですから、一番効率のよい分担をしていきたいと思います。ただ一方、国家は自立していますので、その自立した国家がどう考えるかというのが障壁になっていると思います。

グローバリゼーション的考え方と言えば、あなたの国は石油が出ますよね、石油だけ掘っていて、あとのものは輸入すればいいじゃないですか、それが一番効率がいいですよと言って、ああ、そうですねと言う国はないと思うんです。ある程度必需品を自給していくというのは国家としての役目ですから、そこら辺が、グローバリゼーションとの接点・融合の難しいところだと思います。

ただ、グローバリゼーションというのは力があるせい、例えば日本は工業国で、電化製品とかを常に輸出していた国ですけども、統計を見ても、2000年には電子レンジの輸入は36%だったんですけども、2021年には100%輸入になってしまったそうです。掃除機は29%が65%に、洗濯機も17%が85%にという具合で、輸入が多くなってきています。

輸入が多くなって、安く物が買えて結構なのかもしれませんが、自立という意味では、何かあったときには入ってこなくなりますので、白物家電だったらいいかもしれませんが、これが食料だったらどうなのかという話があります。グローバリゼーションと自立分散という考え方をどこでどう調和させるのかというのは非常に悩ましい問題だと思うんです。

すけれども、そのことについて知事はどのようにお考えでしょうか。

#### 山本一太知事

グローバル化と、それから自立分散型の社会は両立できると思います。まずは、グローバル化の弊害っていろいろあると思うけれど、グローバル化から逃れることはもうできないと思っています。このグローバル化された世界とうまく付き合いつつ、いかに繁栄の道を探っていくかというのが、日本に残されたというか、県に与えられたミッションだと、私は考えています。

群馬県の目標として自立分散型の社会というのがあるんですけど、自立分散型の社会にするとということイコール資源を無駄遣いしないということになり、地球環境問題に貢献するということだと思えますよ。資源をなるべく使わないやり方で成長することになると出てくるのが、例えば群馬県が非常にポテンシャルがある再生可能エネルギーとか、あるいは県民性の強みを活用したいろんな展開とか、こういうものがあるのかなと思っています。

成長のところで、不利な条件があつてというのは、不利じゃなくて、見方によっては実はアドバンテージになるという話をしたんですけど、だから事業で、有機農業をやっているわけですよ。有機農業を推進する1つの目的は、もちろん、例えば中国市場がいつか開くかもしれない。輸出を考えたときに、最大のポイントになるのはやっぱりオーガニックだと私は思っています。世界の消費者の動向として、みんな健康志向がすごく高いんだから、日本の農畜産物の信頼性をまさに高めるためにも、群馬県というのはオーガニック先進県だというのが大事だと思っています。もう一つは、まさに県議がおっしゃるように、国家的な規模で考えろみたいなグローバリズムと、国益をむき出しにするナショナリズムの対立みたいなものがあるって、ここのところずっとナショナリズムが台頭してきているじゃないですか。それはアメリカのトランプさんを見れば、アメリカファーストとかいって、世界のことよりアメリカのことをやれと言っているし、ロシア、言うまでもないですよ。中国、それから、グローバルサウスの極をつくろうとしているインド、全部多分そういうことになっているのかなと思うんですが、先ほど申し上げたとおり、自立分散型社会をつくるということによって、その成長と、それからいわゆるグローバル化と付き合わなければならぬという、そういう世界は、しっかりとバランスを見つけれれると思っています。

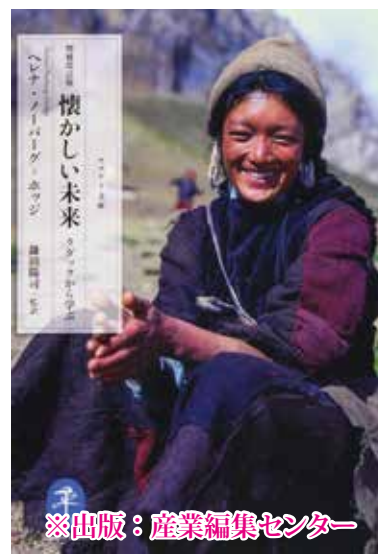
もう一つ申し上げたいのは、群馬県は、初めて水力で稼ごうとしているわけですよ。リソースがなければ社会保障に回すお金がないですし、未来への投資もできない。水力こそ、群馬県が恵まれている水資源を利用した最高の自立分散型エネルギーだと思っています。水力発電で稼ぐ仕組みをつくりたいと思います。もちろんできると思います。おそらく何十億かのお金を稼げるような状況になると思います。

お金が稼げるからと、ばらまきになっちゃったら、ウルグアイラウンド対策費みたいに、せっかくなお父ちゃんか命がけで取ってきたのに、結局、雲散霧消というか、あちこちに取られちゃうみたいになっちゃうから、例えばですよ、1つの考え方としては、基金にしてバイオマスに突っ込むとかということを行っているわけですよ。

これは、あくまでも構想ですけど、バイオマスって、そんな都市部に造るわけじゃないから、吾妻かもしれないし、利根沼田かもしれないし、多野郡かもしれないし、そのバイオマスに突っ込むことによって、林業が収益の上がる産業になれば、それはむしろ森林を持っている地域のメリットになってくるということなんだと思います。ですから、実は自立分散型の社会をつくるというのは、地球環境に優しい群馬県をつくるということと、新たな成長の芽を生み出すと、両方につながる方策ではないかなと考えています。

#### 入内島道隆

最後に紹介させていただきたい事例が2つありました。1つは、ここに本があるんですけど、インドのラダックという地域です。プータンがよく話に出てくるんですけども、実はインドのラダックという地域も、植民地化されたことのない地域がどう暮らしているのかということ調査した人がいて、地球上のほとんどの地域は植民地になっているわけですけど、なっていない人たちの暮らしが幸せなのかどうかということを調査した本です。



筆者がラダックの川で洗濯しようとしたら、小さな女の子が寄ってきて、恥ずかしそうに「この川では洗濯しない」と言ったそうです。「この川の水は下の集落の人が飲み水として使ってるの。洗濯はあっちの川です」と言ったそうです。「あっちの川は灌漑用水だから、洗濯しても大丈夫」と、小さな子どもがわざわざ来て言った。それだけ聞いても、この地域の暮らしがどういふものかが分かると思うんですけども、ここは3,000m級の高地なので、耕地は僅かにあるんですけども、耕作できる期間というのは、4ヶ月とか5ヶ月しかないんです。耕作できる期間が短いだけに、耕地を余分に所有しようとする人もなくて、作れるだけの耕地を持っていればいいという、そういう生活をしてきた地域なんですけれども、やはり文明が入っていくことによって、徐々に変わっていくということがこの本に書いてありました。

我々が考えなければいけないことは、そういう地域は遅れているから、我々文明国が何とかしてあげなくちゃいけないんだと、つい考えてしまうわけですけども、それは我々のおごりなんじゃないかなという認識を持つことが大事なんじゃないか。彼らが望めば手助けするのは必要かもしれませんが、文明国だからといって、ずかずか入っていくということは、してはいけないんじゃないかなと思いました。

最後にもう一つの事例ですけども、冒頭の「日本の自殺」で、内部崩壊が国を衰退に向かわせるという考え方が正しいとするならば、内部からの萌芽というか、芽吹きは国をもう一回再生する力になるんだというふうな、逆に思います。

北軽井沢で起こっていることをちょっと紹介させていただきたいと思います。この方は、浅間山麓の自然の魅力を知って欲しいと、キャンプ場を始められました。そのコンセプトが、ルオムというフィンランド語で表されています。ルオムというのは自然に従う生き方という意味です。この地球上の主人は人間ではない、人間は自然の摂理に従って生きるのだという認識なのです。また、大自然を感じてキャンプをするにとどまらず、たき火を囲み、家族で会話する機会を創出し、そのことで、家族という最小単位のコミュニティの再構築ができることを証明しています。考えてみれば家族といっても、親も子も忙しく、じっくりと家族全員で過ごす時間が果たしてどのくらいあるのかということ。さらに、山間地で経済的自立を考えたとき、林業や農業へも事業展開しております。農業についても、最新のBLOF理論というのを取り入れて、現在試行しています。

この活動を見ていて、小さな単位での自発的な行動がいかに大切かを痛感します。自ら考え、あるべき姿を見つけ、そこに到達すべく行動し、その過程で多くの人の共感を生み、結果として社会が変わっていく、そういう自立した活動が群馬県の象徴となり、日本に広がり、世界を変える知事の理想にも近づいていくと思います。こういう活動をぜひ支援していただきたいと思っていますので、よろしくお願いたします。

#### 山本一太知事

入内島県議のおっしゃったエピソードでいろいろ思うところがあるんですけども、我々は、私たちの強みを忘れちゃいけないと思うんですね。森林がある、川がある、豊かな自然がある、そんなに交通の便、例えば電車が走っているわけじゃないけれど、スローライフがある、そういうところを強みとして活かしていく。東京のまねをしちゃいけない。私はあまり群馬県に高いビルを建てるべきじゃないと思っています。群馬県が一番いいところは、東京に比べると空が広いことだと思っているので、こういうことを決して忘れてはいけないなということを思いました。

それから、知事はやっぱりスピリチュアルリーダーなので、地球環境問題についても、例えば5つのゼロ宣言ごみ問題についても、しっかり県民にそういう認識を持っていただくために、もっともっと努力はしようかなと思っています。何度も申し上げますが、本当に幅広い知識をお持ちなので、いろんな形で、また県政にもアドバイスをいただければ大変ありがたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

# VOICE OF GUNMA

編集・発行責任者：群馬県議会議員 入内島 道隆 / 〒377-0601 群馬県吾妻郡中之条町四万 3838 湯元 四萬館内 /

電話：080-9469-2003 / WEB サイト：https://iriuchijima.jp/